

地域防災人材育成プログラムにおける評価手法の構築

岐阜大学	正会員	○小山	真紀
(元) 岐阜大学	非会員	藤瀬	亮平
岐阜大学	正会員	村岡	治道
岐阜大学	正会員	高木	朗義
岐阜大学	正会員	能島	暢呂

1. 研究の背景と目的

わが国は、世界でも最も自然災害リスクの高い国の一つである。大規模災害における被害を軽減させるためには、地域防災力の強化が必要不可欠であるため、近年、全国の自治体や大学、団体によって防災人材を育成するプログラムが実施されている。しかし、育成すべき防災人材の定義や、講座を通して目標する人材を育成できたかを評価する共通のプロセスは未だ確立されていないのが現状である。本研究では岐阜大学と岐阜県によって設置された「清流の国ぎふ 防災・減災センター」（以下センターと称す）が開講する「防災リーダー育成講座（基礎編）」（以下本講座と称す）の事例研究を通して、地域防災人材の共通する枠組みとその評価手法の提案を目指す。そのための第一段階として、地域防災人材の基本的枠組み（メタルーブリック）と対象講座における評価観点尺度（ルーブリック）を試作し、ルーブリックによる評価を通じて、「育成カリキュラム評価」を試みる。あわせて、防災人材となることを目指す人はどのような属性を持つ人なのかを把握するための「受講者属性分析」を行うことで、評価手法の基礎を構築する。

2. 講座概要

本講座は地域の防災リーダーとして活躍できる人材を育成することを目的としている。1 コマ 60 分の講義が1日につき6コマ、全4日の構成となっており、座学とグループワークによって防災・減災に関する専門的知識とスキルを習得できる内容となっている。2017年8月から9月の毎週水曜、あるいは木曜日に実施された平日コースと同年11月から12月の毎週日曜日に実施された日曜コースがあり、受講者は申し込み時にどちらかを選択、もしくは両方を組み合わせて受講する。本講座は岐阜県内の一般の人を対象とするとともに、岐阜大学生向けには全学共通科目「地域防災リーダー基礎」として開講しているため、受講者は一般受講者と大学生が混在している。受講者は講義毎に、講義内容の理解度等の達成度自己評価（5段階）および講義の評価を問う内容の「科目別レポート」を、また講座修了時には受講者属性などを問う内容の「全体レポート」を提出し、これによって評価を行う。

3. 受講者属性分析

3.1 受講者情報

今年度の受講者登録状況は、全体で198名であった。3章では受講者の年代、性別によるコース間の違いを確認する。また先行研究¹⁾では受講者の防災に関わる立場によって達成度に差異が生じることが示唆されたため、今年度は受講者を「行政」、「学校関連」、「民間企業・団体」、「地域」、「学生」の5属性に分類し達成度に違いがあるかを確認する。属性別の受講者数は、行政24人、学校関連26人、民間企業・団体46人、地域38人、学生34名であった。

3.2 受講者ニーズ

受講者が講座に求めるニーズを明らかにするために、本講座開講年度の2015年度以降の講座修了者のうち、応募時にメールアドレスの記載があった受講者を対象としたWEBアンケート調査を実施した。回答期間は2018年1月11日から1月15日の5日間とし、回答結果を属性毎に分類しニーズの整理を行った。アンケートキーワード 地域防災人材、人材育成プログラム、ルーブリック、評価、受講者ニーズ、受講者属性

連絡先 〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸1-1 岐阜大学流域圏科学研究センター 小山真紀 email: maki_k@gifu-u.ac.jp

ト内の「本講座を通して身につけたかったことは何ですか?」に関する回答について、身につけたかったことをルーブリックの評価観点に合わせ、7項目に分類し各回答に当てはまる項目をカウントした。この結果、全ての属性で防災に関する基礎知識およびスキルの獲得へのニーズが最も多く、受講者属性別にそれほど大きく変わらないことが分かった。

4. 評価手法の試作

今年度は昨年度のルーブリックを見直し、評価材料となる項目の追加を行った。追加した項目は「理解度確認クイズ」および「顔と名前の一致する関係を築けた人数」の項目である。また、メタルーブリックの評価観点に合わせる形に修正した。(図1、青：自己評価、白：客観評価)

評価観点		評価尺度			
		低い	普通(終了時に求められるレベル)	高い	
スキル	知識	①: 講義内容を理解できた ④: 作業内容を理解できた 理解度確認クイズ	あまり理解できなかった 多少は理解できなかった 0問、1問正解	半分くらい理解できた 半分くらい理解できた 2問正解	かなり、ほとんど理解できた かなり、ほとんど理解できた 3問正解
	主体性	⑤: 自分から発言できた ⑥: 自分から行動できた	あまり発言できなかった 多少は発言できた あまり行動できなかった 多少は行動できなかった	半分くらいは発言できた 半分くらいは行動できた	かなり、ほとんど発言できた かなり、ほとんど行動できた
	人材育成	②: 講義内容を人に伝える事ができる ⑦: 参加者同士で協力して作業を行うことができた	あまりできない 多少はできる あまりできなかった 多少はできる	半分くらいはできる	かなり、ほとんどできる かなり、ほとんどできた
	ネットワーク	⑧: 参加者同士で、今後連携していけそうな関係を作ることができた	あまりできなかった 多少はできる	半分くらいはできた	かなり、ほとんどできた
企画・立案・実践		顔と名前の一致する関係を築けた人数	0人	1人、2人、3人	4人、5人以上
		③: 地域、グループ、仲間などでやってみたいと思う	あまり思わない 多少は思う	半分くらいは思う	かなり、ほとんど思う

図1 2017年度ルーブリック

5.1 理解度確認クイズ

どちらのコースも全体の86%以上のクイズにおいて正答率が80%以上という非常に高い正答率であった。これは、理解度確認クイズの難易度設定として「防災リーダーとして最低限知っておくべき心構え」とされた科目が多かったことによる。すなわち、本講座では、高度な知識が獲得できたかどうかではなく、「最低限知っておくべき事を知っていること」が評価基準となっていることを意味している。

5.2 顔と名前の一致する関係を築けた人数

全体では2人、3人と関係を築いた受講者が多く、日曜コースは平日コースと比較して達成度が低い結果になった。組合せ受講者は平日・日曜コースと比べて、取り立てて関係構築が難しいという状況ではないことが示された。

5.3 達成度自己評価

座学、グループワークを合わせた全講義において両コースともに過半数が「5:ほとんど」、「4:かなり」、「3:半分くらい」と回答しており自己評価における達成度は高いといえる。

6. 属性分析

5章ではコース間に、受講者の達成度に大きな相違がないことが確認された。6章では属性による差異について確認するために、前提条件を設定し達成度分析を行う。達成度は各評価観点における平均値を5点満点に基準化し評価した。属性間の違いが統計的に意味のある違いであるかどうかを確認するために項目間の分散分析を行った。分散分析の結果より、理解度確認クイズを除く評価観点において、属性間の到達度に統計的に有意な差は認められなかった。

7. 結論

受講者ニーズが属性を問わず「防災に関する基礎知識・基礎スキル」であること、また、ほとんどの評価観点において得点の平均値が「普通」レベルであったことから、本講座の設定レベルとカリキュラムは概ね妥当であることが確認された。また受講者属性分析の結果から、防災人材となることを目指す人はコースや属性による違いよりも個人差の方が大きく、属性別に評価基準の設定を変える必要性は認められないことが確認された。

参考文献

- 1) 森脇美沙：防災人材育成マネジメントサイクル構築のための評価プログラム作成に向けた研究、2017.3